

## 【2】パーリ聖典における「仏を上首とするサンガ」の用例と実態

[0] パーリ聖典における「仏を上首とするサンガ」の用例には以下のようなものがある。この総合研究の方法論と文献観にのっとり、まず原始仏教聖典における全資料を紹介して、その後に考察を加える。原始仏教聖典というのは、経蔵と律蔵に含まれる文献をいう。なお資料紹介にあたっては、‘Buddhapamukha bhikkhusaṃgha’の実態を知らしめてくれるような情報のみとし、原則としてすべて取意である。「仏を上首とするサンガ」がどのようなサンガであるかを示すような記述には、下線を施しておいた。

なおここでは注釈書文献は必要な時にのみ言及することにし、原則としてすべて省略する。また本論文の資料収集に当たっては、今この総合研究を手伝ってくれている東洋大学大学院の博士前期課程に在学中の仙仁晶君にお世話になった。記して謝意を表する。

[1] 以下がパーリの原始仏教聖典に見いだされる「仏を上首とするサンガ」の全資料である。「サンガ」の部分はほとんどが‘bhikkhusaṃgha’であるが、他の用語も含まれているので、すべてに原語を付しておいた。

- (1) 世尊はアングの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-satehi) 遊行してチャンパーに到着され、ガッガラー蓮池のほとりに住された。そのときバラモンのソーナダントと種々の問答をされたあと、優婆塞となったソーナダントは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhiṃ bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は 比丘サンガとともに (saddhiṃ bhikkhusaṃghena) ソーナダントの住居に行き、行って設けの座につかれた。そこでソーナダントは 仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した (paṇītena khādaniyena bhojanīyena)。DN.04 *Soṇadaṇḍa-s.* (種徳経 vol. I p.111)
- (2) 世尊はマガダの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-satehi) 遊行してカーヌマタというマガダのバラモン村に到着され、アンバラッティカー園に住された。そのときクータダントバラモンは犠牲祭 (yañña) に関する問答を通して法眼を生じて、「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhiṃ bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は 比丘サンガとともに (saddhiṃ bhikkhusaṃghena) クータダントバラモンの犠牲祭の場所に行き、行って設けの座につかれた。そこでクータダントバラモンは 仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。DN.05 *Kūṭadanta-s.* (究羅檀頭経 vol. I p.127)
- (3) 世尊はコーサラの人々の間を 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañca-mattehi bhikkhu-sattehi) 遊行してサーラヴァティに入られた。そのときローヒッチャバラモンは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhiṃ bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はローヒッチャバラモンの住居に行き、設けの座につかれた。ローヒッチャバラモンは 仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食と

を手ずから供養した。DN.12 *Lohiccha-s.* (露遮経 vol. I p.224)

〈4〉世尊は大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim)、王舎城を出発され、パータリ村に到着された。マガダの大臣であるスニーダとヴァッサカーラは「ゴータマは今日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) マガダの大臣であるスニーダとヴァッサカーラの住居に行き、行って設けの座につかれた。そこでスニーダとヴァッサカーラは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhu-samgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。DN.16 *Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃経 vol. II p.081)

〈5〉世尊はヴェーサーリーに到着してアンバパーリ園に住された。アンバパーリーは「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。リッチャヴィ人たちも「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待したが、世尊はすでにアンバパーリーの招待を受けていると言われた。世尊は翌朝、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) アンバパーリ園に行き、行って設けの座につかれた。そこでアンバパーリーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。その時アンバパーリーは「この園林を仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 寄進します」と言い、世尊はこれを受けられた。DN.16 *Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃経 vol. II p.094)

〈6〉ある時世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住しておられた。そのときニガンタ派の徒であるサッチャカは世尊と論争して敗れ、「ゴータマは明日、比丘サンガと共に (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝世尊はニガンタ派の徒であるサッチャカの園に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。そこでニガンタ派の徒であるサッチャカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。MN.035 *Cūlasaccaka-s.* (薩遮迦経 vol. I p.227)

〈7〉あるとき世尊はコーサラの人々の間を大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim) 遊行された。その時世尊は阿難に過去のこととして、迦葉仏の話がされた。(以下はその話の一部である) その時カーシ王であったキキーが「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝迦葉仏はカーシ王のキキーの住所に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。カーシ王のキキーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食・噉食とを手ずから供養した。MN.081 *Ghaṭikāra-s.* (陶師経 vol. II p.045)

〈8〉ある時世尊はバツガのスンスマラ山のベーサカラ林の鹿苑に住しておられた。その時ボーディ王子はサンジカープッタ青年を使いをやり、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) ボーディ王子の食を受けてください」と食事に招待した。翌朝世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) コーカナダ

宮殿に登り、設けの座につかれた。ボーディ王子は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。

*MN.085 Bodhirājakumāra-s.* (菩提王子経 vol.II p.091)

(9) ある時世尊はヴィデーハ人の住んでいるところを 500 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) 遊行された。その時ミティラーにブラフマーユ・バラモンが住んでおり、世尊が 32 相を具えていることを知って、「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食事を受けてください」と食事に招待した。翌朝世尊はブラフマーユ・バラモンの住居に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。その時ブラフマーユ・バラモンは七日間、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。*MN.091 Brahmāyu-s.* (梵摩経 vol.II p.133)

(10) ある時世尊は釈迦族のカピラ城のニグローダ園に住されていた。そのときマハーパジャーパティー・ゴータミーは自分の織った衣を世尊に布施しようとした。世尊は「サンガに布施しなさい、あなたがサンガに布施すれば私も供養を受けるし、サンガも同じである (saṃghe, Gotami, dehi; saṃghe te dinne ahañ c' eva pūjito bhavissāmi saṃgho cāti) 」と言われた。これに対して阿難はマハーパジャーパティー・ゴータミーは養母であって恩を受けており、世尊からは三帰・五戒を授けられているのであるから受けるべきだと勧めた。世尊は阿難に 14 種の対人施 (cuddasa pātipuggalikā dakkhiṇā)、7 種の僧類施 (satta saṃhagatā dakkhiṇā)、4 種の施清浄 (catasso dakkhiṇāvisuddhiyo) を説かれた。その 7 種の僧類施が以下のように説かれる。次に、阿難よ、これら七種の僧類施がある。第 1 の僧類施は仏を上首とする両サンガに (Buddhapamukhe ubhatosaṃghe) 対する布施 (dānaṃ deti)。第 2 の僧類施は如来滅後の両サンガに (tathāgate parinibbute ubhatosaṃghe) 対する布施。第 3 の僧類施は比丘サンガに (bhikkhusaṃghe) 対する布施。第 4 の僧類施は比丘尼サンガに (bhikkhunīsaṃghe) 対する布施。第 5 の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘と比丘尼をサンガが指定してほしいと (ettakā me bhikkhū ca bhikkhuniyo ca saṃghato uddissathā ti) 願ってする布施。第 6 の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘をサンガが指定してほしい (ettakā me bhikkhū saṃghato uddissathā ti) と願ってする布施。第 7 の僧類施は私のためにこれだけの数の比丘尼をサンガが指定してほしい (ettakā me bhikkhuniyo saṃghato uddissathā ti dānaṃ deti) と願ってする布施である。*MN.142 Dakkhiṇāvibhaṅga-s.* (施分別経 vol.III p.253)

(11) ある時世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住された。そのときニガンタの弟子であったシーハ將軍はニガンタナータプッタに止められたけれども振りきって世尊と会い、法眼を生じて、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はシーハ將軍の住居に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。シーハ將軍は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。*AN.008-002-012* (vol.IV p.179)

- 〈12〉ある時世尊は舎衛城・祇多林の給孤独園に住されていた。そのとき世尊は給孤独長者に対して、「一人の見具足者に布施すれば大きな果を得ることができる。それよりも一人の一来者に……、それよりも一人の不還者に……、それよりも一人の阿羅漢に……、それよりも一人の独覺に……、それよりも如来・応供・正等覺者に……、それよりも仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) ……、それよりも四方からやって来るサンガに (cātuddisaṃ saṃgham) 精舎を建立する方が……、それよりも仏法僧に歸依する方が……、それよりも五戒を受ける方が……、それよりも慈心を修する方が……、それよりも無常想を修する方が果報が大きい」と説かれた。*AN.009-002-020 (vol.IV p.392)* その他 *Itivuttaka-A. (vol.I p.091)* 参照
- 〈13〉あるとき世尊は、1250 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim addhateḷasehi bhikkhusatehi) アングッタラーパの人々の中を遊行し、アーバナと名づけるアングッタラーパ国のある町に入られた。その時螺髻梵志ケーニヤは「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は「ケーニヤよ、比丘サンガは大人数で 1,250 人ですよ (bhikkhusamgho addhateḷasāni bhikkhusatāni)」と言われた。ケーニヤはそれでも招待した。翌朝世尊はケーニヤの住所に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。ケーニヤは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。*Suttanipāta 003-007 (p.102)*
- 〈14〉ある時世尊はクンディヤーのクンディッターナ村に住されていた。そのとき仏を上首とする比丘サンガは (Buddhapamukho bhikkhusamgho) 一人の優婆塞によって翌日の食事に招待されていた。その優婆塞は大目連の侍者 (Mahāmoggallānassa upaṭṭhāko) であった。世尊は目連に「今、コーリヤ人のスッパヴァーサー (Suppavāsā) が難産で苦しんでいるので、スッパヴァーサーに供養を譲るように」と説得させた。そしてスッパヴァーサーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 7日の間、殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。*Udāna 002-008 (p.015)*
- 〈15〉ある時世尊はコーサラの人々の間を大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim) 遊行された。その時一人の牧牛士が「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 牧牛士の家に行き、行って設けられた座につかれた。牧牛士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 水少なき粥や新しい醍醐味を手ずから供養した。*Udāna 004-003 (p.038)*
- 〈16〉あるとき世尊は、マガダ人の住むところを大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim) 遊行され、パーティリ村に到着された。そのときマガダの大臣スーニダとヴァッサカーラは、「ゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けて下さい」と食事に招待した。翌朝世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) マガダの大臣スーニダとヴァッサカーラとの家に行き、行って設けられた座に着かれた。マガダの大臣スーニダとヴァッサカー

- ラは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。 *Udāna* 008-006 (p.085)
- 〈17〉 コーナーガマナ仏のとき、ダナンジャナニーとケーマーと私スメーダーの三人は、すべての部分が飾られた作りのよい園林を喜んでブツダを上首とするサンガに (Buddhapamukhasaṃghassa) <sup>(1)</sup> 捧げた。 *Apadāna* (p.512)
- (1) 異読では *Buddhapamukhassa saṃghassa* となっている。
- 〈18〉 私 (菩薩) は師 (satthar) のもとに行き、正覚者 (Maṅgalabuddha をさす) を上首とするサンガに (sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ) 香華の花輪を捧げた。香華の花輪を捧げると、牛乳を饗応した。 *Buddhavaṃsa* (p.029)
- 〈19〉 その時私 (菩薩) はジャティラ (Jaṭila) という名の王の家臣であったが、正覚者 (Padumuttarabuddha をさす) を上首とするサンガに (sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ) 手ずから食事と衣服を寄進した。 *Buddhavaṃsa* (p.050)
- 〈20〉 その時私 (菩薩) はアリンダマという名のクシャトリヤであったが、正覚者 (Sikhībuddha をさす) を上首とするサンガに (sambuddhapamukhaṃ saṃghaṃ) 食べ物と飲み物を饗応した。 *Buddhavaṃsa* (p.080)
- 〈21〉 世尊はビンピサーラ王を上首とする 11 那由他のマガダのバラモン・居士 ( *ekādasanahutānaṃ Māgadhikānaṃ brāhmaṇagahapatikānaṃ Bimbisārapamukhānaṃ* ) に遠塵離苦の法眼を生ぜしめた。そして王は「世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は比丘 1,000 人よりなる大比丘サンガとともに ( *mahatā bhikkhusaṃghena saddhim bhikkhusahassena* ) 王舎城に入った。その時帝釈天は子供の姿を化現して仏を上首とする比丘サンガ ( *Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa* ) を先導し、偈を説いた。時に世尊はマガダ王セーニヤ・ビンピサーラの住処に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 設けの座につかれた。時にマガダ王セーニヤ・ビンピサーラは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhaṃ bhikkhusaṃghaṃ) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。そして「私は竹林園を仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa) 施します」といい、世尊は園を受けられた。 *Vinaya* 「大毘度」 (vol. I p.037)
- 〈22〉 その時マガダ国に五種の病、すなわち癩、癰、白癩、乾瘡、顛狂が多かった。人々は五種の病に罹りジーヴァカの許に行き、「師よ、願わくは我等を治してください」と言った。ジーヴァカは「私には仕事がたくさんあって、マガダ国のビンピサーラ王にも後宮にも仏を上首とする比丘サンガ (Buddhapamukho ca bhikkhusaṃgho) <sup>(1)</sup> にも近侍しなければならない」といって断った。そこで人々は出家した。ジーヴァカは病比丘を治すために王事ができなかった。しかも病気の治った比丘たちは還俗してしまった。そこでジーヴァカが五種の病気にかかった者は出家させないでほしいと願い出たので、世尊は「五種の病気にかかった者は出家させてはならない、悪作である」と定められた。 *Vinaya* 「大毘度」 (vol. I p.071)

(1) この場合の比丘サンガは釈尊教団の可能性もある。しかし王舎城以外のサンガは含まないであろう。あるいは文字通り釈尊の直弟子たちを意味するかも知れない。

- 〈23〉 その時、一人のバラモンが新しい胡麻と新しい蜜とを得た。そこでそのバラモンに思いが生じた。「これを仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 施与しよう」と。そこでバラモンは世尊のところに行き、「ゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊はそのバラモンの住処に行き、行って比丘たちとともに (saddhim bhikkhusamgham) 設けの座につかれた。バラモンは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「薬韃度」 (vol. I p.212)
- 〈24〉 時に世尊は随意の間、王舎城に住して後、バーラーナシーに向って遊行された。そのとき優婆塞スッピーヤは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は優婆塞スッピーヤの住処に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。優婆塞スッピーヤと優婆夷スッピーヤーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「薬韃度」 (vol. I p.216)
- 〈25〉 時に、世尊は随意の間バーラーナシーに住された後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim addhatelasehi bhikkhusatehi) アンダカヴィンダに向って遊行された。その時、その地方の人々は多くの塩、油、米、嚼食を車に載せて仏を上首とする比丘サンガの (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 後に随って、「もし順番に当れば食を設けよう」と考えた。そのとき順番にあたらぬ一人のバラモンがあって、「もし順番に当れば食を設けようと考えて、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 随ってからもう2カ月をすぎた。まさに食堂を観察し食堂に見えない所の〔食〕を調べよう」と考えて、食堂になかった粥と蜜丸とを調べて世尊に、「ゴータマは私の粥と蜜丸とを受けてください」といった。世尊は「婆羅門よ、然らば比丘らに (bhikkhūnam) 施与せよ」といわれた。比丘等 (bhikkhū) は疑惧して受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時にそのバラモンは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの粥と蜜丸とを手ずから供養した。Vinaya「薬韃度」 (vol. I p.220)
- 〈26〉 その時新たに信心を得た一人の大臣があって、仏を上首とする比丘サンガは (Buddhapamukho bhikkhusamgho) 翌日の食事に招待されていた。時に彼に思念が生じた。「私は、まさに1,250人の比丘のために1,250鉢の肉を調べ、一々の比丘に一々の鉢の肉を奉ろう (addhatelasannam bhikkhusatānam aḍḍhatelasāni maṃsapātisatāni paṭiyādeyyam ekamekassa bhikkhuno ekamekaṃ maṃsapātīm upanāmeyyam) 」と。時に彼はその夜を過ぎて殊妙なる嚼食と噉食と1,250鉢の肉とを調べ世尊に時を告げた。世尊は大臣の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に彼は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「薬韃度」 (vol. I p.222)

〈27〉世尊は随意の間王舎城に住された後、1,250 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) パータリガーマに向かって遊行された。時にマガダ国の大臣、スニダとヴァッサカーラは「ゴータマは今日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けてください」と食事に招待した。世尊はマガダ国の大臣スニダとヴァッサカーラとの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。マガダ国の大臣、スニダとヴァッサカーラとは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。

*Vinaya* 「菜菔度」 (vol. I p.226)

〈28〉時に世尊はコーリヤ村に至られた。その時姪女アンバパーリーはヴェーサーリーを出てコーリヤ村に行き、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。時にヴェーサーリーのリッチャヴィ等も「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私たちの食を受けてください」と招待した。しかしすでにアンバパーリーの招待を受けていると告げられた。世尊は翌朝姪女アンバパーリーの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。アンバパーリーは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食を手ずから供養した。そして「わたしは、このアンバパーリー園を仏を上首とする比丘サンガ (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) に施与したい」と言った。世尊は園を受けられた。*Vinaya* 「菜菔度」 (vol. I p.231)

〈29〉その時著名なるリッチャヴィ人たちは仏法僧を讃歎した。ときに世尊はニガンタナータプッタの弟子であったシーハ將軍を教化された。シーハ將軍は「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はシーハ將軍の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。シーハ將軍は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。

*Vinaya* 「菜菔度」 (vol. I p.233)

〈30〉世尊は随意の間ヴェーサーリーに住された後、1,250 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) バッディヤに向って遊行され、バディヤジャーティヤーヴァナに住された。そのとき居士メンダカは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は居士メンダカの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。そして「世尊のバディヤに住される間、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusamghassa) 常恒食 (dhuvabhata) をさしあげたい」といった。*Vinaya* 「菜菔度」 (vol. I p.242)

〈31〉時に世尊は随意の間バディヤに住された後、居士メンダカに諮らずに1,250 人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi

bhikkhusatehi ) アングッタラーパ国に向って遊行された。居士メンダカはこれを聞いて追いかけて、道の途中で追いついて、「世尊は明日、比丘サンガと共に (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は居士メンダカの家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に居士メンダカは1,250人の牧牛人に命じて言った。「一々の牝牛を牽いて一々の比丘に侍し新しき乳を以て供養しよう」と。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食と新しき乳とを手ずから供養した。比丘等 (bhikkhū) は疑惧して乳を受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時に居士メンダカは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と食と新しき乳とを以て手ずから供養した。Vinaya「薬鍵度」(vol. I p.243)

〈32〉時に世尊は次第に遊行してアーパナに到られた。そのとき螺髻梵志ケーニヤは飲料 (pāna) を整えて、「世尊は私の飲料を受けてください」といった。世尊は「ケーニヤよ、それでは比丘等に施与せよ (bhikkhūnaṃ dehi)」といわれた。比丘等は (bhikkhū) 疑惧して受けなかった。世尊は「比丘等よ (bhikkhave)、受けて食せよ」といわれた。時に螺髻梵志ケーニヤは、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの飲料を手ずから供養した。そして「ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は「比丘サンガは1,250人の比丘からなっています (bhikkhusamgho adḍhatelasāni bhikkhusatāni)」と言われた。ケーニヤは「それでもゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」といった。世尊は螺髻梵志ケーニヤの庵に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に螺髻梵志ケーニヤは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「薬鍵度」(vol. I p.245)

〈33〉世尊は随意の間アーパナに住した後、1,250人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim adḍhatelasehi bhikkhusatehi) クシナーラーに向って遊行された。時にマッラ子ロージャは、食堂に菜と堅餅がないのを見て、「世尊は菜と堅餅を受けて下さい」と言った。世尊は「それなら比丘らに与えなさい (bhikkhūnaṃ dehi)」といわれた。比丘ら (bhikkhū) は疑いがあるが受けて受けなかった。世尊は「比丘らよ (bhikkhave)、受けなさい」といわれた。時にマッラ子ロージャは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 多くの菜と堅餅とを手ずから供養した。Vinaya「薬鍵度」(vol. I p.247)

〈34〉時にジーヴァカ童子はマガダ国のピンピサーラ王の痔瘻をただ一たび塗って除いた。時にマガダ国の王ピンピサーラ王は癒えて、五百の婦女をして一切の莊嚴をもって飾らせ、次に此を解いて積ましめ、ジーヴァカ童子に言った。「ジーヴァカよ、この五百の婦女の一切の莊嚴を以て汝に帰す」と。ジーヴァカは「大王よ、止めてください、わたしの仕事を命じて下さい」といった。そこで王は「ジーヴァカよ、それならば自分と後宮とおよび仏を上首とする比丘サンガ (1) とに (Buddhapamukham bhikkhusamgham)



侍せよ」と命じた。「わかりました、大王よ」とジーヴァカ童子はマガダ国のピンビサーラ王に応えた。Vinaya「衣韃度」(vol. I p.268)

(1) 資料〈22〉の註(1)を参照

- 〈35〉時に、世尊は随意の間バーラーナシーに住された後、舎衛城に向って遊行された。時にヴィサーカーミガーラマターは、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は神通力をもってヴィサーカーミガーラマターの家に現われ、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時にヴィサーカーミガーラマターは仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養してから、世尊に八願を請うた。Vinaya「衣韃度」(vol. I p.290)
- 〈36〉世尊は随意の間、ヴェーサーリーに住した後、バツガ国に向って遊行され、バツガ国・スンスマーラギリ・ベーサカラヴァナ・ミガダーヤに住された。その時、ボーディ王子はサンジカープッタを遣わして、「世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊はコーカナダ堂に上り、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時にボーディ王子は、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。Vinaya「小事韃度」(vol. II p.127)
- 〈37〉その時、世尊は王舎城、竹林迦蘭陀迦園に住された。時に王舎城の長老は一日にして六十の精舎を建てしめ、世尊に「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は王舎城の長老の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。王舎城の長老は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、「福業を願うが故に此処に六十の精舎を作らしめました。此等の精舎をどのようにいたしましょうか」と問うた。世尊は「居士よ、然らばこの六十の精舎を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやってくるサンガに (āgatānāgatassa cātuddisassa samghassa) 奉上せよ」と答えられた。「わかりました」と王舎城の長老は世尊に答え、その六十の精舎を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやってくるサンガに (āgatānāgatassa cātuddisassa samghassa) 奉上した。Vinaya「臥座具韃度」(vol. II p.146)
- 〈38〉給孤独居士は所用で王舎城にやってきた。そのとき王舎城の長老によって翌日、仏を上首とするサンガが (Buddhapamukho samgho) 招待されているのを知った。そこで世尊に会いに行って、「世尊は比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は王舎城の長老の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。時に給孤独居士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、舎衛城で雨安居を過ごされることを請うた。Vinaya「臥座具韃度」(vol. II p.154)
- 〈39〉時に、世尊は随意の間ヴェーサーリーに住された後、舎衛城に向って遊行された。その時、六群比丘の随従比丘等は仏を上首とするサンガ (Buddhapamukhassa samghassa)

の前に行き、先に精舎を取り臥處を取って、「これは我等の阿闍梨に属す、此は我等に属す」と主張した。時に具寿舍利弗は仏を上首とするサンガ (Buddhapamukhassa samghassa)の後に往ったので、精舎は已に取られ、臥處を得られずに一の樹下に坐した。*Vinaya*「臥座具躡度」(vol. II pp.160、163)

〈40〉時に、世尊は次第に遊行して舍衛城に至り、ジェータ林給孤独園に住された。時に給孤独居士は「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は給孤独居士の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。給孤独居士は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養し、「私はジェータ林をどういたしましょうか」と尋ねた。世尊は「居士よ、然らばジェータ林をすでに来ておりこれから来るであろう四方からやって来るサンガに (āgatānāgata cātudisassa samghassa) 奉上せよ」といわれた。「わかりました」と給孤独長者は世尊に答え、ジェータ林を以てすでに来ておりこれから来るであろう四方からやって来るサンガに奉上した。*Vinaya*「臥座具躡度」(vol. II p.163)

〈41〉その時、世尊はヴェーランジャーのナレールのプチマンダ樹の下に、500人の比丘からなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusamghena saddhim pañcamattehi bhikkhusatehi) 住された。そのときヴェーランジャー婆羅門は、「ゴータマは比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) ヴェーランジャーにおいて安居するのを承知して下さい (adhivāsetu ca me bhavaṃ Gotamo Verañjāyaṃ vassāvāsaṃ) 」と願い、許された。そして「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊はヴェーランジャー婆羅門の家に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 設けの座につかれた。その時ヴェーランジャー婆羅門は、仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。*Vinaya Pārājika 001* (vol. III p.001)

〈42〉マガダ国王セーニヤ・ビンピサーラの血縁の者に邪命外道に出家した者があった。その時にこの邪命外道は、セーニヤ・ビンピサーラ王の許に行って、「大王、私は一切沙門に供養をなそうと思ひます」と言った。王は「大徳よ、もしあなたが仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukham bhikkhusamgham) 第一に食を供するならばそうしなさい (sace tvam bhante ... paṭhamam bhojeyyāsi evaṃ kareyyāsīti) 」と答えた。そこで彼は比丘たちのもとに (bhikkhūnaṃ santike) 使いを送り、「比丘らは (bhikkhū) 明日、私の食を受けて下さい」といわせた。比丘たちは「別衆食は世尊によって禁止されている」と恐れて受けなかった。そこで彼は世尊のもとに至り、「大徳ゴータマも出家者であり、私もまた出家者です。出家者が出家者の施食を受けるのは相応しい。大徳ゴータマは明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusamghena) 私の食を受けてください」と食事に招待した。世尊は黙然としてこれを受けられた。そして「沙門の施食時には別衆食をとることを許す (anujānāmi bhikkhave samaṇabhattasamaye gaṇabhojaṃ bhujjituṃ) 」と定められた。「沙門施食時」とは、何らかの出家者となった者が食をなすことであって、「沙門施食時である」と(認識し

て) 食すべきである。Vinaya Pācittiya 032 (vol.IV p.074)

(43) その時仏世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住されていた。その時ヴェーサーリーにおいて美味食の施食が続いて行われた。時に一人の貧しい雑役夫が考えた。「この諸人は誠を尽して施食をなす、この功德は少なくないであろう。自分もまた施食しよう」と。こうしてこの貧しい雑役夫はキラパティカの許に行って言った。「旦那さま、私は仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa) 施食したいと思います。私の賃金を与えてください」と。キラパティカも信仰があったので、余分の賃金を与えた。この貧しい雑役夫は世尊のもとに行き、「世尊は明日、比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 私の食を受けて下さい」と食事に招待した。世尊は「賢者よ、大比丘サンガであることを (mahā bhikkhusaṃgho) 知りなさい」といわれたが、貧しい雑役夫は「世尊よ、大比丘サンガであってください (mahā bhikkhusaṃgho)。私は多量の木綿を調べ、木綿を添えて飲物を十分に調べましょう」と言った。世尊はその貧しい雑役夫の住処に行き、行って比丘サンガとともに (saddhim bhikkhusaṃghena) 設けの座につかれた。貧しい雑役夫は食堂において比丘たちを (bhikkhū) 給仕した。Vinaya Pācittiya 033 (vol.IV p.075)

[2] 煩を恐れず、調査しえた範囲の「仏を上首とするサンガ」の用例のすべてを紹介した。これについて若干の考察を施してみよう。上記の資料にはすべてに「仏を上首とする (Buddhapamukha)」という言葉は入っているのであるが、上記資料をいくつかの視点で分類してみると次のようになる。

[2-1] まず「サンガ」であるが、全43例のうち、〈10〉の‘ubhatosaṃgha’ (両サンガ)、〈17〉〈18〉〈19〉〈20〉〈39〉の‘saṃgha’を除いて、他の37例はすべて‘bhikkhusaṃgha’である。「両サンガ」はもちろん比丘サンガと比丘尼サンガを意味するが、‘saṃgha’とのみするものは「比丘サンガ」を意味すると解して差し支えないであろう。

もちろん理念的には、釈尊は比丘・比丘尼の両者を含む全出家修行者のリーダーであることには違いないのであるが、「仏を上首とするサンガ」は現実的なサンガであって、釈尊は男性であるから、いかに仏と言えども比丘尼サンガの現実的な意味での「上首」にはなれないということであろう。

[2-2] この「仏を上首とする比丘サンガ」が現実的なサンガであったことは、文脈上からこれらの構成人数が示されていることから明らかである。‘bhikkhusaṃgha’の人数が明示されているものを列挙してみると次のようになる。

500人の比丘からなる大比丘サンガとするもの：〈1〉〈2〉〈3〉〈9〉〈41〉

1,000人の比丘からなる大比丘サンガとするもの：〈21〉

1,250人の比丘からなる大比丘サンガとするもの：〈13〉〈25〉〈26〉〈27〉〈30〉  
〈31〉〈32〉〈33〉

人数は示されないが大比丘サンガとするもの：〈4〉〈7〉〈15〉〈16〉〈43〉

このように、「仏を上首とする比丘サンガ」の「サンガ」は、けっして理念的なサンガではなく、おそらく釈尊が直接に指導されていたであろうサンガであったことが推測される。

[2-3] これらのうち大部分は、これら「仏を上首とする比丘サンガ」は何らかの布施の対象とされているのであるが、何を布施されるかで分類してみると、〈10〉の7種の僧類布施、〈12〉の不特定のもの、〈15〉の水少なき粥と新しい醍醐味、〈17〉の園林、〈18〉の香華の花輪・牛乳、〈19〉の食事と衣服、〈20〉の食べ物と飲み物、〈25〉の粥と蜜丸、〈32〉の飲料、〈33〉の菜と堅餅を除いて、他のすべては翌日あるいはその日の殊妙なる嚼食と噉食と表現される食事である。

このように食事を主とする何らかの品物が布施されるということは、それを受けるサンガは、食事などを享受できる現実的なサンガであるということであって、これも「仏を上首とするサンガ」が理念的なものではなく、現実的なサンガであったということを証明する。

布施以外は〈22〉〈34〉のジーヴァカの病気の治療と、そして〈39〉のただその後をついて行った、とするもののみである。もちろん〈39〉はその後にしたがって遊行したのであるから、現実的なサンガであることは言うまでもないが、ジーヴァカの病気治療がどの範囲のサンガであるかは詳らかではない。しかしその他の「仏を上首とするサンガ」がすべて現実的な「釈尊をリーダーとする500人とか1,250人の比丘からなる大比丘サンガ」とすれば、やはりこれもそのように理解すべきであろう。とするならば、ジーヴァカは不特定のすべての仏教の出家者の病気を治療する役割を与えられていたのではなく、いわば特定の現実的な「仏を上首とするサンガ」を治療するのがその役割であったのであろう。おそらくそれはピンビサーラが釈尊に対する布施の一環として、ジーヴァカに「仏を上首とするサンガ」の構成員の病気治療を命じたものであったのであろう。

なお〈5〉〈21〉〈28〉は食事を招待した後、園林を「仏を上首とする比丘サンガ」に寄進したとされ、また〈37〉〈40〉は精舎を「すでに来ており、これから来るであろう四方からの出家修行者を含めたサンガ」に寄進したとされ、〈30〉は「仏を上首とする比丘サンガ」に常恒食をさし上げたいと申し出て許されたとしている。

食事の布施は「仏を上首とする比丘サンガ」に対してなされたとしても、精舎や園林などの不動産は「すでに来ており、これから来るであろう四方からの出家修行者を含めたサンガ」に寄進されるのが望ましいとされている。しかしながらそうでないケースもあったということであり、それがいかなる理由によるものかは後の機会の検討課題としたい。

[3] 以上のように「仏を上首とするサンガ」の用例の大部分は「比丘サンガ」であって、それらは500人とか1,000人、1,250人と限定される比丘たちからなる、釈尊とともに遊行し、釈尊とともに食事の招待を受け、釈尊とともにその家に行き、そして設けの座に坐して、釈尊とともに食事の饗応を受け、釈尊とともに布施を受けるといふ、釈尊が直接に指導されていた現実的な目の前にある「比丘サンガ」であって、けっしてインド各地に散在する比丘・比丘尼のすべてを統括するような理念的な「釈尊のサンガ」ではないことは明らかである。

ただし〈10〉の「仏を上首とする両サンガ」は不特定の比丘サンガならびに比丘尼サンガをさすものであろう。なぜなら「仏を上首とする両サンガ」に続くものは、「如来滅後の両サンガ」「比丘サンガ」「比丘尼サンガ」であり、仏在世時代と仏入滅後に分けているにすぎないからである。

なおこの「仏を上首とする比丘サンガ」のメンバーの中に釈尊自身が含まれるかどうか

については後述する。

[4] 以上はパーリ聖典の用例であるが、これに対応する漢訳聖典ではどのようになっているであろうか。「仏上首比丘僧伽」のようなそのまま直訳したような語形は見いだせないので、対応経のあるいくつかの経あるいは律を調査してみよう。ここでは「上首」に相応する言葉と、「サンガ」に相応する言葉にアンダーラインをひいておく。

[4-1] 〈1〉の相当漢訳である「長阿含経 22」『種徳経』（大正 01 p.094 上）には、種徳バラモンが釈尊に帰依するけれども、食事に招待する場面はない。

〈2〉の相当漢訳である「長阿含経 23」『究羅檀頭経』（大正 01 p.096 下）では、食事に招待する場面は、「重白佛言。唯願世尊。更受我七日請。爾時世尊默然受之。時婆羅門即於七日中手自斟酌供佛及僧」となっているのみであって、「上首」という意を表す語は使われていない。

〈3〉の相当漢訳である「長阿含経 29」『露遮経』（大正 01 p.112 下）では、釈尊と弟子たちを食事に招待する場面は「婆羅門聞法已白佛言。唯願世尊及諸大衆明受我請」とされ、露遮バラモンのところに行く場面は「爾時世尊即著衣持鉢。從諸弟子千二百五十人俱詣婆羅林」「爾時世尊至婆羅門舍就座而坐。時婆羅門以種種甘膳手自斟酌供佛及僧」とする。「諸弟子千二百五十人を從えて俱に」というのであるから、ここには「上首」の意味が含まれていると解してよいであろう。

〈7〉の相当漢訳は「中阿含経 63」『鞞婆陵耆経』（大正 01 p.499 上）であるが、ここでは波羅捺迦私国の頰鞞王が迦葉仏を招待する場面は、「叉手而向白迦葉如來無所著等正覺曰。唯願世尊。明受我請及比丘衆」とされ、その家に行く場面は「諸比丘衆侍從世尊往詣頰鞞王家。在比丘衆上敷座而坐」となっている。このなかの「諸比丘衆は侍從して」と「比丘衆の上に在りて」が、釈尊が上首であることを含意しているかも知れないけれども、ここでもパーリ聖典のように明確には表現されていない。

このような食事の招待以外のケースでは、〈10〉の相応漢訳である中阿含 180 「瞿曇彌経」（大正 01 p.722 上）は「佛在世時。佛爲首施佛及比丘衆。是謂第一施衆。得大福、得大果、得大功德、得大廣報」としており、「佛爲首」が「仏を上首とする」に相当するであろう。

また〈22〉の相応漢訳には『四分律』（大正 22 p.808 下）、『五分律』（大正 22 p.116 上）、『十誦律』（大正 23 p.152 下）、『僧祇律』（大正 22 p.420 中）、『根本有部律』（大正 23 p.1034 下）があるけれども、いずれも「仏を上首とする」などの語句は含まれていない。

また〈34〉の相応漢訳は「王言。汝不得治餘人病。唯治我病佛及比丘僧宮内人」『四分律』（大正 22 p.852 中）とするのみである。

[4-2] このように漢訳の原始仏教聖典では、それを含意すると見なされうる語句は存するが、パーリ聖典の「仏を上首とする」にそのまま相当するような表現は存在しない。

しかし漢訳の原始聖典においても、釈尊は1,250人とか500人の比丘などと共に遊行され、食事の招待を受けられ、そして彼らに説法されたということは変わらないのであるし、その釈尊とともに行動する比丘たちが「サンガ」であることはきちんと認識されていたように思われるから、「仏を上首とするサンガ」という言葉は用いられていなくても、釈尊を指導者

とする「大比丘サンガ」が認識されていたことには違いがないであろう。

[5] ちなみに原始仏教聖典における一般的な対告衆の数である 1,250 人は、三迦葉の弟子たち 1,000 人と、舎利弗・目連の仲間たち 250 人を加えたものと理解されている。この併せて 1,250 人が、「仏を上首とする比丘サンガ」と理解されたのは、おそらく彼らが「白四羯磨具足戒」によってではなく、「善来比丘具足戒」によって釈尊の直接の弟子となったとされるからであろう。

「善来比丘具足戒」は、「私は願わくば世尊のみもとにおいて、出家して具足戒を得たい (labheyāhaṃ bhante bhagavato santike pabbajjāṃ, labheyāhaṃ upasampadam)」と願い出て、釈尊がサンガに諮ることなく「来れ比丘よ (ehi bhikkhu)」<sup>(1)</sup> と許されたものであるから、これら「善来比丘具足戒」によって出家を許された比丘たちは、釈尊が親しく指導された弟子たちであると考えられるからである。ちなみに『四分律』は「我今欲於如来所修梵行」「来比丘」とし<sup>(2)</sup>、『五分律』は「願与我出家受具足戒」「善来比丘」とする<sup>(3)</sup>。

余談であるが律蔵によれば、「白四羯磨具足戒」が制定される前に、「三帰具足戒」が許されたことになっている。パーリ律蔵の「受戒韃度」や『四分律』の「受戒法」によれば、「三帰具足戒」が許されたのは、鹿野苑からウルヴェーラーに行かれる前になっているので、したがって三迦葉の弟子たち 1,000 人と、舎利弗・目連の仲間たち 250 人を教化する前ということになる。したがって律蔵の「受戒韃度」が歴史的順序にしたがって書かれているとするならば、三迦葉や舎利弗・目連は「三帰具足戒」で受戒してもよかったということになるが、『大般涅槃経』においてスバダの善来比丘具足戒による出家が描かれるように<sup>(4)</sup>、「三帰具足戒」や「白四羯磨具足戒」が制定された後も、釈尊にはサンガに諮ることなく、「善来比丘具足戒」で自分の弟子を取る特権が付与されており、そのように弟子になったものは釈尊の「直接の弟子 (sakkhi-sāvaka)」と認識されていたから<sup>(5)</sup>、三迦葉や舎利弗・目連の仲間たちが「善来比丘具足戒」で釈尊の直弟子になったとしても不思議はないわけである。

またこの三帰具足戒が許されるようになった理由は、諸国に布教に出された弟子たちが釈尊から善来比丘具足戒を受けるために行ったり来たりして、疲れ果てた結果であるとされるから、三帰具足戒で弟子たち自身が出先で自分の弟子を取ってよいと定められたのは、諸国に弟子たちを布教に出される前、すなわち同時に釈尊がウルヴェーラーに出発される前ということはある。したがって史実としては、「三帰具足戒」が許されたのは、少なくとも三迦葉と 1,000 人の螺髻梵志に善来比丘具足戒を与えられた後であって、『パーリ律』<sup>(6)</sup>『四分律』<sup>(7)</sup>『五分律』<sup>(8)</sup>『根本有部律』<sup>(9)</sup>『僧祇律』<sup>(10)</sup>などは、三迦葉と 1,000 人の徒衆も、舎利弗・目連と 250 人の仲間もすべて「善来比丘具足戒」で出家したとされている。

たであろう。あるいは舎利弗・目連とその仲間 250 人に善来具足戒を与えた後であったかも知れないが、これについてはまた別の機会に論じたい。ともかく三迦葉の 1,000 人の弟子たちと、舎利弗・目連の 250 人の仲間たちは、釈尊によって直接に「善来比丘戒」を与えられたと考えられていたのである。

1,250 人という釈尊の直弟子たちはこのように理解されるのであるが、「仏を上首とする

比丘サンガ」の数が、1,250 人であったり、1,000 人あるいは500 人であったりするにはそれほど意味はないようにも思われる<sup>(11)</sup>。むしろ「仏を上首とする比丘サンガ」の構成員がいつも一定でなく、たえず変化しえることが前提になっていることの方が、重要であろう。次節において述べるように、三迦葉や舍利弗・目連などが「仏を上首とするサンガ」を離れて独立していき、彼ら自身を「上首とするサンガ」が成立することも当然ながら想定されうるからである。

なお「仏を上首とする比丘ニサンガ」が存在しないのは、先にも指摘しておいたようにこの比丘サンガが現実的なサンガであって、釈尊といえども男性であるから、理念的な指導者とはなりえても、現実に比丘ニサンガのメンバーとなつて、そのリーダーになることはできないからである。

- (1) *Vinaya* (vol. I p.12)
- (2) 大正 22 p.788 下
- (3) 大正 22 p.105 上
- (4) 法顯訳「大般涅槃經」(大正 01 p.204 中)は「我今欲於佛法出家。於是世尊即便喚之。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。即成沙門」とし、白法祖訳「仏般泥洹經」(大正 01 p.171 上)は「願佛加哀。受我爲沙門。須拔髮自然墮地。袈裟著體」とし、失訳「般泥洹經」(大正 01 p.187 下)は「異學須跋。願受衆祐自然法律。捨家就戒沙門之行(以上は阿難の言葉)。佛以可其就戒之志曰。是吾未後得證見淨者。異學須跋也。即授戒爲比丘。一心受不放逸。以健制以志惟以斷却。如所欲下鬚髮被袈裟」とし、*‘Mahāparinirvāṇasūtra’* (和訳・下 p.645)は阿難が「遍歴行者であるスバドラはよく説かれた教えと戒律とにおいて出家し、完全な戒律、修行者たる状態を得ようと望んでいる」と釈尊に伝え、釈尊は「来れ、修行僧よ、清浄行を行え」といわれた。それがスバドラの出家であったとする。また別訳雑阿含 110 (大正 02 p.413 下)も「須跋陀羅。於佛法中。願樂出家。爾時世尊。即告須跋陀羅。善來比丘。鬚髮自落。法衣著身。即得具戒」とし、雑阿含 979 (大正 02 p.254 中)も「是須跋陀羅外道出家。今求於正法律出家受具足得比丘分。爾時世尊告須跋陀羅。此比丘來修行梵行。彼尊者須跋陀羅。即於爾時出家。即是受具足成比丘分」とする。*DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’* (大般涅槃經 vol. II p.152)は阿難に出家せしめたとするが、「彼は世尊の最後の直接の弟子であった (so bhagavato pacchimo sakkhi-sāvako ahoṣi)」とする。また長阿含 002「遊行經」(大正 01 p.025 中)も「於是須跋即於其夜。出家受戒淨修梵行」とした後で、「是爲如來最後弟子」とする。
- (5) 上記註の中の *DN.016 Mahāparinibbāna-s.* 長阿含 002「遊行經」の文章を参照。
- (6) *Vinaya* vol. I p.33, 42
- (7) 大正 22 pp.796 中、799 上
- (8) 大正 22 pp.109 中、110 下
- (9) 大正 23 p.1027 上
- (10) 大正 22 p.412 下
- (11) パーリの *DN.*は 500 人とする場合が多く、少数であるが 1,250 人とする。*MN.SN.AN.*には人数が示されない。漢訳の『長阿含』は大部分が 1,250 人とされ、『中阿含』は大部分が「諸比丘」「大比丘衆」とするが、一部に 500 人とする経がある。『雑阿含』も大部分は「諸比丘」とするが、一部の経には 1,250 人、500 人、40 人とするものがある。『増一阿含』も大部分が「諸比丘」とするが、500 人とする経も相当数あり、一部は 1,250 人とする。

[6] なお *‘pamukha’* という言葉には、「指導者」という意が含まれているということ

先に書いた。それではこの「指導」の内容はどのようなものであったのであろうか。しかしこれは今さら議論するまでもなく、「経蔵」や「律蔵」に描かれている釈尊の活動そのものが「指導」の内容であったということが出来る。なぜなら「経蔵」や「律蔵」の対告衆は1,250人とか500人、あるいは諸比丘、大比丘衆とされ、それは「仏を上首とする比丘サンガ」に他ならないからである。

ただし‘pamukha’という言葉は舍利弗・目連などの仏弟子にも使われるのであるが、彼らの「指導」と仏の「指導」はおのずからに相違するものがあつたであろう。これについては後述する。

[7] 最後に「仏を上首とする比丘サンガ」という語句の中に含まれる「サンガ」という語のもつ意味を考えておこう。

[7-1] 多くの和訳者はここで使われている‘bhikkhusaṃgha’あるいは‘saṃgha’を、「比丘衆」「比丘衆たち」「比丘衆一同」「比丘たち一同」「修行僧ら」「修行僧の群れ」「比丘集団」「比丘等」「僧衆」などと訳している。これらはおそらく「サンガ」の意味をそれほど厳密に捉えていない結果として採用された訳語であろう。「比丘僧伽」「僧伽」「サンガの団体」「比丘僧団」「僧団」「教団」と訳されている場合は、表面上は「サンガ」という言葉を、単に「集団」を意味するものではないということが自覚されているようにみえるけれども、テクニカルタームとしての、あるいは律蔵用語としての「サンガ」が認識されているかどうかはわからない。

[7-2] しかし原始仏教聖典において使われている‘bhikkhusaṃgha’あるいは‘saṃgha’は、特に「律蔵」の中に使われている場合は、決して単なる「集団」を意味するのではなく、きちんとテクニカルタームとしての「サンガ」と認識されなければならない。先に紹介した資料から分かる通り、「仏を上首とする比丘サンガ」という語句が使われる多くの場面は食事を招待された時のことである。律蔵においては、パーリ波逸提 32 が「別衆食 (gaṇabhojana) を取ってはならない。病時・施衣時・作衣時・行路時・乗船時・大衆会時・沙門施食時は除く」と定められ、「別衆食 (gaṇabhojana) とは4人以上の比丘が五種正食中の一をもって招待され、食するときこれを衆食となづく」と解説されているように<sup>(1)</sup>、原則として食事の招待はその時点でこのサンガを構成している比丘全員が含まれていなければならない。結果的にそれがサンガを構成する比丘の一部となってしまう場合には、それは「別衆」ということになってしまい、「サンガ」とは称しえないどころか、波逸提の罪となるのである。そこで〈42〉では、邪命外道の食事の供養を、比丘たちは「別衆食は世尊によって禁止されている」と恐れて受けなかったのである。

そしてこの戒条は提婆達多が利養と名聞を失って、他の比丘たちとは別に請食したために定められたものとされるように、破僧に関わるきわめて重要な規定なのであって、〈32〉〈43〉などはこのサンガが1,250人もの比丘からなる「大比丘サンガ」であるが、それでもよろしいかと念を押しているのは、比丘の集団への食事の供養は、原則として一人の漏れもなく、全員のメンバーがそろった、律蔵で定められたサンガの条件が整ったサンガに対してでなければならないからである。

もちろん施主の都合によってはサンガの中から選ばれた数人が招待を受ける場合も許され



ている。けれどもそれはサンガの意思によって選ばれたものでなければならない。たとえばサンガが法臘順や籤引きなどによって決めるのであって、それが資料〈10〉に表わされている。このような場合は、サンガがそれをサンガ全員でないことを承知していることであるから「別衆」とはならないけれども、もちろんこのような一部の者たちを「サンガ」とは称しえない。

したがってここに‘saṃgha’という言葉が使われているのは、‘gaṇa’すなわち別衆ではなく正式な「和合サンガ」であるということを表していると解さなければならない。その証拠に、〈25〉〈31〉〈33〉などはこのサンガで釈尊を除く比丘たちをいう場合には‘bhikkhū’、すなわち「比丘たち」という言葉が用いられているのである。

- (1) *Vinaya* vol.4 p.74。 また出家修行者は乞食で食を得ることが望ましいが、余得(atirekalābha)も認められている。これはサンガ食(saṃghabatta)と別請食(uddesabhatta)と招待食(nimantana)と行籌食(salākabhatta)と半月食(pakkhika)と布薩食(uposathika)と月初日食(pāṭipadika)である。*Vinaya* (vol.1 p.95)

[7-3] とはいいいながら、釈尊は当然のことながら目の前にいる1,250人の比丘たちや1,000人の比丘たちの背後に、すべての比丘や比丘尼たちを見ておられたことは言うまでもない。直接の指導はこの1,250人や1,000人の比丘たちにされたが、それはすべての比丘や比丘尼たちへの指導でもあったわけである。

また次節で述べる「仏弟子たちを上首とするサンガ」資料の〈1〉や〈4〉に見られるように、「仏弟子たちを上首とするサンガ」や多くの比丘たちが、「仏を上首とするサンガ」と合流して一つのサンガを形成することも常にあったことであろう。布薩の日にも当たれば、当然のことながら一つの界に住することになるすべての出家修行者は、一つのサンガとして布薩羯磨を行うことになるからである。そして次の【論文14】に書くように、比丘たちは雨安居の前や後に、釈尊を訪ねて指導を受けるのが常であったから、そのようなことはしばしば起こったであろう。したがってこのような際には、「仏を上首とするサンガ」のメンバーは、仏が善來具足戒で出家させた「直弟子」たちだけでなく、合流している比丘たちもそのメンバーの中に入ることになる。対告衆の数が一定しなかったり、「諸比丘」「大比丘衆」などとされ、人数が特定されないのは当然であったということができる。

[8] 以上のように、「仏を上首とする比丘サンガ」ないしは「仏を上首とするサンガ」は、仏が「指導する」、500人とか1,000人、1,250人、あるいは「諸比丘」「大比丘衆」からなる、現実的な律蔵の規定にのっとった「サンガ」であって、けっして単なる比丘たちのぼんやりとした集団ではないということになる。このような意味では、先に紹介した翻訳者である日本の仏教学者たちの多くは、‘Buddhapamukha bhikkhusaṃgha’を正確に理解していなかったということになるであろう。

また同時に「仏を上首とするサンガ」が、釈尊によって仏教の出家者のすべてが統合されるような意味での「釈尊のサンガ」でもなく、また釈尊を中心に理念的な紐帯で結びついた「釈尊のサンガ」というものをも意味しないということも明らかである。

あるいは日本の宗派的な組織を考えるなら、この1,000人とか1,250人とかなる「仏を上首とするサンガ」が統括宗教法人の本部となって、全国に散らばるたくさんの個別法人とし

「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」

での「仏弟子たちを上首とするサンガ」を統括する、いわば本山のような機能も併せ持つものとなったであろうが、次の【論文14】において述べるように、「釈尊のサンガ」は中央集権的なレギュラーチェーン店方式的な組織ではなく、ゆるやかなフランチャイズチェーン店方式的な組織であったために、「仏を上首とするサンガ」が本山的機能をはたす必要はなく、活動としては「仏弟子のサンガ」と同様なことを行えばそれでよかったように思われる。

[9] しかしながらこの「サンガ」の中に仏が含まれるのか、それとも仏は除外されるのかは微妙であって、部派仏教になってからこれが論議されることになる。ちなみに資料〈10〉〈12〉にはこれに関係のありそうな記述がなされている。また「仏を上首とするサンガ」が「仏弟子を上首とするサンガ」と同等のものであると考えるならば、仏もサンガの一員であったと理解しなければならないであろうが、しかしこの問題は本論には直接の関係はないから、もし必要ならば別の機会に論じたい<sup>(1)</sup>。

(1) 本『モノグラフ』第11号に掲載した提婆達多論文でも触れたように、釈尊が提婆達多が破僧したそのサンガの一員であったかどうかは微妙である。